

風土記の丘の花だより¹¹⁸

今、そしてこれから見られる植物(2022年1月15日)

一年で最も寒いとされる「寒・かん」に入りました。たしかに寒いですが、雪こそ積もりませんが、寒暖計は氷点下を示し、池に氷が張った日もありました。こんな寒さの中、ふきのとうがもう顔を出しました。この季節になると毎年のように紹介していますが、あの丸っこい可愛い姿を見たら、紹介せずにはいられませんね。



これは小早川家の庭で撮ったものです。なぜかこのふきのとうは早く出ます。ご承知のようにキク科の植物、フキのつぼみがふきのとうです。フキは雌雄異株ですから、ふきのとうにもオスとメスがあります。写真がどちらか・・・私レベルでは、花が咲くまでわかりません。人によって「雌花がおいしい」の、「天ぷらは雄花に限る」のなどとおっしゃいますが、ホンマかいな。



前回「ウメはまだまだ」と書きましたが、12日に見に行くと、なんと紅梅が4輪だけ咲いていました。でも白梅はまだまだ「つぼみかたし」です。これは、修復古墳の西にある梅園で撮りました。ここの白梅は萼が緑色の「リョクガク」という品種です。他のウメは萼が紫色なので比較するとよく分かります。咲いたら見比べてみてください。



タブノキの冬芽がきれいな紅色に色づいています。タブノキは大きくなる常緑のクスノキ科の木で、風土記ではたくさん見ることができます。手に取れる枝を観察すると、枝先に大きな冬芽を見ることができます。ここで豆知識です。鱗みたいなものでガッシリ包まれたこんな芽を「鱗芽・りんが」といいます。



万葉植物園のミツマタのつぼみが大きくなってきました。万葉集に「春されば まづさきくさの・・・」と詠われているように、春まだ寒い頃、他の花に先がけて黄色い花を咲かせる木です。ところで、「さきくさ」とは、ミツマタの古い呼び名です。まだまだつぼみは堅いですが、きれいな花が咲くのを楽しみに、寒い冬を過ごしましょう。